

佳作

心にはるバリア

静岡県 静岡市立蒲原中学校三年 栗原 微始

「すみません。ご迷惑をおかけします。」

丁度、学校帰りの学生や社会人などで駅が溢れかえる頃。駅員さんは、何度も何度も「すみません」と大声で叫びながら人混みをかき分けていく。その手元には、車椅子とそれに乗る優しそうな男性がいた。どれだけ声を張り上げてもまわりは、道をあけようともせず無関心。繰り返すほど、車椅子の男性は申し訳なさそうに俯き、顔を曇らせていった。その表情を見て、私は何とも言えない気持ちになっていった。

電車が来て、多くの人が我先にと乗車していく時、事件は起きた。

「邪魔なんだよ。ろくに動けもしないなら、電車になんか乗るな。」

心の無い言葉を吐く中年男性。私の心がスツと冷

えていくのを感じた。さらに舌打ちをひとつ。車椅子の男性はいまにも泣き出しそうな顔で、

「すみません。」

とつぶやいた。私は、車椅子の男性が謝る必要なんてないと思った。ただ私達が困った時に、他の人の手を借りると同じように、協力してもらっただけ。「謝らなくていい」と心の中では思っているのに口に出すことはできなかった。

「すみません。やっぱり帰ります。」

そう車椅子の男性が言っても、誰もなにも言えなかった。今、彼を謝らせてしまっているのは沈黙を貫いている私達だった。そんな時、ヒーローは現れた。「大丈夫ですよ。」

どこからかもう一人の駅員さんが颯爽と現れて、私達がためらってしまっていた言葉を平然と言ったのけた。そして、素早く電車との段差をなくすスロープを設置し、車椅子の男性を電車に乗せてしまったのだ。

「皆さま、ご協力ありがとうございます。」

人を思いやる優しい言葉と、謝罪ではなく感謝を伝える姿は見ている人の心を動かした。誰からともなく、

「大丈夫ですか。」

「手伝いましょうか。」

といった声が広がり、車椅子の男性は、

「ありがとうございます。」

と笑った。親切をしようとする心にはられたバリアが、一人のヒーローによって壊されたのだ。

私は最初に自分から声をかけられなかったことを、とても後悔した。たった一言。それさえ言えれば、こんなにも人の心を軽くできるのに。知ったからこそ、私はあの駅員さんのように、ためらわずに優しい言葉を困っている人にかけられる勇氣を持ちたい。また、現代社会ではバリアフリー化が進められていて、エレベーターが色々な所についていたり、スロープがついたりしている。けれど私がこの出来事を含めて思ったのは、本当のバリアは私達の心にあるのではという事だ。親切にしようとする心にバリアができてしまい、本当はするべきだとわかっていても出来なくなってしまう。そのバリアをなくせるような強い心を持っていきたい。